

統

一

次 目

立正大師の功勳……………	本	多	日	生
菩薩行に就て……………	本	多	日	生
寶 物 集……………	平	康	日	生
治法要旨……………	先	儒	遺	稿
良齋問話……………	安	積	遺	稿
日什大正師略傳……………	竹	內	日	信
聖訓摘要……………	本	多	日	生
◎治法思國會創立……………				
◎各地教信……………				

四月發行 本多日生著

信仰修養、思想より論じたる

日蓮主義の本領

定價金貳圓五拾錢
五二八頁
【送料十二錢】

目次 (總の部)

- 一、信仰と修養と思想
- 一、信仰修養思想と立正大師
- 一、教育勅語の解釋と應用
- 一、思想の基準

(信仰の部)

- 一、眞の佛と眞の我
- 一、信心と正憶念
- 一、菩薩行

(修養の部)

- 一、新時代の婦人の修養
- 一、佛教の六善事
- 一、日蓮聖人の人格

(思想の部)

- 一、國と入と教
- 一、東洋思想の大共通點

以上

右は中央出版社の發行なるも統一發行所へ申込まるれば二割定價より割引する事となれり希望者は統一發行所へ申込まるべし

立正大師の功勳

本多日生

必ずや人間といふものは思想の程度があるからして、そんな修業を少々ぐらゐやつたからと言つて、「卵は鶏が産んだのだ、その鶏は卵から孵出たのだ……」そこまでわかる、「その卵はどうした」「鶏が産んだ」、「その鶏はどうした」「卵から出た」「その卵は」「鶏が産んだ」「サア、どつちが先だ」「鶏が先だ」「さうではなからう、その鶏は卵から出たへ、卵は鶏が産んだんぢやないか」「………といふことになると、十年比叡山頭に於て坐禪を組んでも、鶏が先か卵が先かといふことはわからぬ、さういふことに於て人間の知識といふものは有る限的なもので

それから以上の微妙な點を味はふ力といふものは出て來ないものである。それであるから宗教が普遍的に一般のものを教ふといふのに、さうわからぬ所に引張り込んでまごつかしたゞけでは何にもならない今でも比叡山に行つて見れば澤山の行をやつて居る坊さんが居るが、幾ら坐禪觀法をやらうが、止觀の妙理を味はうが、少しも違ひはしない、そんなことで偉いものになつたと思つたら大間違ひである。だから日蓮聖人はそんな事をやつても駄目だといふので、信行に依つて絶対の佛を信じて、その宗教の情操から導いて人間の人格は高等なる光を發するものであるといふことを説かれた。人間はわからな

い事を餘り考へさせると頭が朦朧として來る、それは王陽明も言つて居る通り、わからない事を永く考へさして置くくと馬鹿になる、馬鹿にならなければ狂人になる、狂人にならなければ坐睡をしてしまふものである。朦朧として決するところの無いやうなことを、ちやうど行止りの露路のやうな所に伴れて行つて何時までも立たして置いたならば、結局人間は死んでしまはなければならぬ、若し元氣が良かつたならば飛出して狂人になる、わからぬ事を以て永くそこに人を据えて置くといふことは、人を損ふものはないと言つて王陽明が佛教に反對をしたのである。だから左様な坐禪などをすることが佛教の正統思想ではない、それは一通り心を鎮める方法ではあるけれども、行止りの所に行つて、どこまでもわからぬ事を考へて居れといふやうなことは釋迦如來は

のものであるとか、禪宗のやうに或は起世間的、獨善的といふやうな行き方をする者がある。日蓮聖人はさうではない、立正安國を標榜して、モツと現實的でなければいかぬ、國を忘れたりしてはいかぬといふので、淨土門や禪宗の弊害を匡正する運動を起されたのであるが、併しそれは何も日蓮聖人の發明ではない、やはり佛教の正統思想がさうなつて居るのである。厭世悲觀ナンといふことは抑々釋尊の最も嫌ひなことである。當時の婆羅門がさういふことをやつて居つた、或は川の中に飛込んで死んだり、或は飯を食はずに斷食の行をして干ばしになるやうな事をやつたりしたけれども、釋尊は最初からそんな事をやつては駄目ぢや、腹が減つたならば自分一人さへも歩けなくなる、一人で歩けない者が人を教ふことがどうして出来るか、自分が行倒れになつて

言はぬ。釋尊の弟子が教化を受けたのは、何も朝から晩まで坐禪などをして居るといふことではない、それは一日の中に落着いて端坐する時はあるけれども、唯だ考へてばかり居つて「何年掛つても宜いから隻手の音が聞えるまで考へて居れ」……、そんな事を教へたものではない。それは後代支那の七賢人といふやうな、あゝいふ世の中を捨て、くだらない屁理窟を考へて居るやうな人間の間に佛教が變態を生じて、さうして坐禪觀法に熱中するやうな事が起つたものである。

日蓮聖人は左様なことに賛成を表しないので、やはり相當なる理解と信念といふことから法華經の教を弘めたといふことは、これが佛教の正統思想であると申さなければならぬ。又佛教が厭世的なものであるとか、或は未來觀的

養育院へ入れられるやうになつては、世の中を教ふどころではない、世の中の厄介者である、さういふ暗愚な事をしてはいかぬといふことを最初から言はれて居る。これも常識でわかることである、腹が減つたら歩けなくなるといふことは、やつて見なくてもわかつて居る、だから釋尊は、俺は世の中を教ふのであるから、飯を食はずにヒヨロ／＼になるといふやうなことはいかぬ。身體は最も強壯でなければならぬ、精神に於てはモウ畏れる所は無いけれども身體が弱過ぎる、人間の肉體は俺の精神に伴はないといふことを慨かれて居るくらゐである。心の方はモウ完成されて居るから心配は無いが、身體の方はどうかすると壊れさうである、だからこの身體は餘程大切にしなければならぬ。故に釋尊の當時の佛教徒の日常生活といふものは、衛生觀念が非常に發達

して居る、食べる物も飲む物も總て衛生上から割出してある、その他醫藥服用の事から總て身體を非常に大事にして居る。阿含經にも説いてある通り、遠きに行かんとする者は車を大事にするといふことがある、これから下の關まで自動車で旅行をしようとするならば、その自動車は壊れないやうな堅牢なる自動車を選んで、さうして手入を良くして大事に使つて行かなければならぬ。太平洋を横断しやうとすれば飛行機の堅牢なるものを拵へなければならぬ、飛行機などはどうでも宜いと言つて飛出したならば太平洋の真中で墜ちてしまふ。事業をやらうとしても身體が確かりして居なければ途中で倒れてしまふだから身體は大事にしなければならぬと釋尊は言うて居るので、決して厭世とか悲觀とかそんな事があ

るべきものではない。唯だ人生に感奮してはならぬ

國界主經とかいふやうに、國といふ表題に依つて起つて居るお經が澤山あるのである。

釋迦が國の事を考へなかつたナンといふことは何等の根據の無いことである、釋迦ぐらゐ國の事を考へたものは無い。何故かと言へば、彼は普通に考へても迦羅衛國の王様になる人である、國家の經緯といふことに就ては、世界のあらゆる思想家の中に釋迦ぐらゐ深く考へて居つた人は無い。直接國を治めて行かなければならぬ位地に居つた人である、往いて言へば轉輪聖王と成るべき人であつたのであるさうして又弟子の中に國王なり宰官即ち政治家といふものを澤山有つて居る點に於て、釋迦ぐらゐ國王の歸依を得て居るものは無い。國王が歸依するといふのは釋迦の教が國家觀念に一致し、國家觀念を大切にして居るからである、だから當時の印度の國王

といふ教はあるけれども、希望を現世に置かないで死んでからのみ教はれたら宜いといふやうな行き方は佛敎の非常な誤解ナンである。これはやはり婆羅門の系統に屬するものと言はなければならぬ。

それから超世間とか超國家とかいふ禪宗の一派の言ふやうなことも、どこからあんな事が出て來たか知らぬけれども、やはり佛敎の本旨ではない。佛敎は阿含の中にもどこまでも國家といふものゝ、大事なこと説かれて居る、國家不衰の七法と言つて、國の衰へないやうに七つの事柄を大事にせよといふことを盛んに説かれ、國に關する教訓といふものは阿含の中にも溢れるくらゐある。さうして國が大事であるといふことは、四恩の中にも國王の恩といふものを説かれて居る、國家といふ問題も到る處に説かれるので、お經の表題の中にも仁王護國とか、或は

は皆な信者であつた。日本でも聖德太子を始めとして、歴代の朝廷が皆なこれを奉ぜられて居る、佛敎が國家を侮辱するとか、國家を忘れて居るといふものであつたならば、さういふ王様や政治家がこれを大切にする譯がない。愚かな者が惡口を言つて「イヤ佛敎は國家觀念が無い」などと言ふのである、それは一面には淨土坊主などが無暗に死んだ先の事ばかり言ふものであるから、その説教を聞いてそんな事を言つた點もある。無學な爺さん婆さんを集めてくだらぬ坊主が説教をする、「モウ現世の事はどうでも宜い、兎に角死んだら阿彌陀様が助けて呉れる……」斯ういふやうな坊主の説教を聞いて佛敎の惡口を言ふて居る。そんなくだらない説教を二遍や三遍聽いて、佛敎がそれだけのものじやと判斷するといふことが甚だ輕卒な考である、そんな粗瀆な事

を以て佛教を批評するナンといふことはあるべきものではない。徳川時代の儒者と云つたところが多くはそんな者である、それは彼の聖堂に行つて見たらわかる、あれだけの學門の中心であつてお経といふものは殆ど一冊もありはしない、書物が無いからだから誰も讀んで居りはせぬ、何も知らないで好い加減の事を言つたものである。

左様にして日蓮聖人の非常に活き／＼した議論も又猛烈に闘はれた事柄も、これは聖人の獨創の意見から生じたものでなくして、佛教の本來の正統思想を擁護する爲に起つたこと、申して宜いのである。將來日蓮門下の進み行くべき道もこの大きな考の中から自ら明かになると思ふ。

(次續)

日蓮聖人の御詠

◎おのづからよこしまにふる雨はあらし
風こそ夜の窓をうつらめ
◎あしの葉のかたちはふねににたれども
浪華の人をえこそわたさぬ

◎たちわたる身のうき雲もはれぬべし
たへのみのりの鷺の山風

x x x x x x

菩薩行に就て

本多日生

次に第二の孝養品といふのに移つて、即ち父母孝養のことに就いて特にお説きになつて居る、釋尊が説かれるには、自分は父母孝養の爲に、恩を報ぜんが爲に菩提を成就したのである、たゞ父母の恩と言つて御馳走を上げて居る位のことでは眞に父母の恩を報じ得ないから、自ら無上正覺を成就して、父母の永遠をも救ふ目的を以て自分は菩提を成就した。であるから眞の父母孝養をなすといふものは釋迦牟尼一人と言つても宜しいと言はれて居る。それは親の側に居つて、風呂に入つて背中を流すとか、お壽司が好きだからお壽司を買つて來るとかいふ者は深山あるだらう、けれどもその親は放つて置けば又三

界の流轉を辿らなければならぬ、それで先づ自ら成道して遂に父母をも永遠に救はんとして最正覺を成就し、父母濟度の力を獲得した如來が、眞に孝養の第一人者と謂ふべきである、斯う説いて居られる。これだけの見識を釋尊は有つて居られた、それが中つて居るか外れて居るか落着いて考へて見なければいけない。一概に親不孝や、親を捨て、山の中に遁げ込んだといふ、そんな簡単な事で以てこの問題を解決する事は出来ない。
釋尊が出家して成道を遂げたいといふことは、なるほど表面の形は、親が位を繼いで呉れといふのを捨て去つたといふやうな譯であるから、人が親不孝

であると疑ふだらうけれども、それは我が佛であるといふことを知らぬからである。實は悉達太子といふものがまごついた人間ではなかつたので、本来の佛が機に乗じ時を測つて衆生濟度の爲に出て來たのである、生れるのも入滅するのも豫定の行動であるから他の世界で盧遮那佛となり或は色々の佛になるけれども、はたらいたものは皆この釋迦牟尼である（この所は法華經の壽量品と同じ事を言はれて居る）或は兜率天に行つたのも、何も考へなしに兜率天に控へ込んだのではない、兜率天に於ても自分は教化の力用をすべく行つたのである、たゞ娑婆世界に降る準備をして居つたのではない。その時は兜率天に於ての教化を爲し、兜率天より降つては閻浮提に於て今衆生を教化して居るこの不可思議の力用といふものは、そんなに表面の觀察を以て判斷さ

政治をお執りになつて居つた。ところが或る時大王が他の國へ行つて見たいとお考へになつた、これは遊びに行かれるのか、何か用事があつて行かれるのかわからぬけれども、他國に行かうとなさつた時に、二つの道がある、一つの道は間違はずに行けば七日で隣國に行ける、一方の道は十四日もかかるそこで七日の方の道を選んで、大した食物も調へず供も伴れずして、妃と太子と三人で旅に出られた。ところがその國の大臣の羅暎大臣といふものが惡逆にして非常な亂暴をはたらくので、王様はどうしてもその國に居つてはならぬやうな事が出來て、一層急いで他國に行かれることになつた、その太子は須闍提といふ太子であるが、その太子を伴ひ妃を伴れて旅に出られた。ところが七日の道を早く行くつもりで行つたところが、いろ／＼心配もして居つたし

れては困る。今我が親孝心の徹底して居るといふ一つの因縁を説くから、これに依つてどの位我が親孝心のものかといふことを一つ考へて見よ。今度は他に大きな目的があるから、親の言ふ通り家に居つて位を繼いで親に給仕奉公が出來ない、親の言ひ分には違はないといふ形を成したけれども、それは表面の觀察である、我が過去世の一つの因縁に寄せて如何に親孝心のものかといふ話をしようといふことになつた。それは一つの因縁話ではあるけれども、どの位親孝心の精神が強いかといふことは、その因縁話に依つて能くわかる譯である。

昔波羅奈といふ國に於て佛がお出ましになつた事がある、それは毘婆尸如來である、その時の波羅奈の王様は非常にえらい人で、正しき教に依つて國を治められ人民を慮げるやうな事はせずして、立派な

又道程の都合で日が暮れたといふやうな事が起つて遂に道を踏み間違へて十四日要する方の道へと入つてしまつた。ところが道は非常に悪いし食物の用意が足らなくなつて、食べる物が盡きてしまつた、モウ僅か一人分の食糧しか無い、道程はまだ／＼幾日かを餘して居る。非常に困つて泣き悲まれたが、王様が思ふには、此處で皆な餓死んでしまふならば他國を回復することも出來ない、夫人は可哀さうだけれども、先づこれを殺して自分も夫人の肉を食ひ太子にも食はして二人が命を繋いで目的の隣國まで行けば、隣國の王が同情して兵を貸して呉れて本國を回復する事が出來やうといふので、刀を抜いて夫人を殺さうとなさつた。その時に須闍提太子がこの恐しい有様を見て、進んで王様の手を捉へて申上げた、「お父様何なるさなのでありますか」父の王は

涙を流して「洵に可哀さうだけれども、此處で三人共に餓死んでしまへば國を回復することは出来ぬ、己を得ぬから汝の母を殺して、その血肉を以つて汝を活かし、自分も生きなければならぬと思ふのだ」その時に太子が言ふには「お父さんがお母さんをお殺しになつたところが、私がどうしてお母さんの肉が食べられますか、何れの處にか子として母の肉を食ふ者あらんや、若し私が食べないとしたならばお母さんを殺した處が何にもならない、私はやはり餓えて死ぬのであります、そんな事は洵に考の無い事でありませぬ、それよりは私を殺して下さい、さうして父母の命をお助け下されば宜いではありませんか」と言つた。併ながら父の王は、自分の可愛い子供を殺すことは出来ない、實に苦んで悶絶宛轉して、地に倒れ、微かな聲を以つて太子に言はれる、「お前

聞き下さるることが子として一番満足であります」と申上げた。父の王はだん／＼理に詰まつて太子に語つて言ふには「お前の言ふことは理窟に合つて居るどうしてもそれに逆ふことは出来ない、何かお前が言ひたい事があるならば序に言へ」須闍提太子は父母に申上げるには「どうぞ子供が可愛いと考へ下さるならば、一遍に殺さないで、一日に三人分の肉を割いて、それを三つに分けて、その二分は父母が召上り、一分は私がそれを食して、命の續く限り行きませう、足の肉を取つても、それを食らへばまだ生きて居ります、手の肉を取つてもそれを食らへば生きて居ります、どうぞそれだけの事はお許し下さい」と言つた。そこで父母は太子の言に従つて三人分の肉を割いて、さうして父母は進出て可愛い子供を抱いて聲を擧げて共に泣いた。今不幸な場合に出

は俺の眼のやうなものだ、何れの處に自分の眼の球を刺り抜いて食ふ者があらうか、俺はこの儘死んでもお前を殺して食ふナンといふことは出来ない、その時に太子が父を諷めて言ふには「それほどまでに可愛がつて下さるのは有難うございますけれども、若し今私の命を斷つて召上らなかつたならば、私はモウ直ぐ餓えて命が絶えるのですから、グズ／＼して居れば血肉が腐つて何の役にも立たないのであります、どうせ死んで骨肉が腐爛するならば、少しも早く私が自殺して、その肉を召上つて下さるならばお父さんお母さんの命を繋ぐことが出来ます、子供が一生涯命に最後のお願ひをして居るのに、これをお聞き下さらぬといふことは、情けある父母のお心とも存じませぬ、空しく死ぬ子供が父母の命を支へるといふ効用があるとしたならば、私の言ふ所をお

會うて心ならずも汝の肉を食らひ、汝をして斯の如き苦痛を感じしめる、さうして考へて見るならば前途まだ數日を要する、到底行先まで汝の肉は無いだらう、こんな事をしてお前を苦しめながら旅をするよりも寧ろ一緒に死んでしまはうぢやないか、逆も耐えられない、一思ひに死ぬ方が宜いと言つて、父母はその子供と相抱いて泣いた。その時に須闍提は微かな聲を以つて申すには「既に私の肉をお上りになつて兎に角一日の旅を續けることが出来ました、これから進み行く道を測るに、さう御心配なされることはありません、私の肉を食ひつゝお進みになれば必ず目的が達せられると思ひます、どうぞそんな弱いな事を仰しやらずに、私は何處までも生きて、肉が減つても死ねば腐りますから何處までも生きて行きます、痛いぐらゐは辛抱しま

す、決して父母が一遍に自殺するといふやうな愚かな事をなさつてはいけません、どうぞ私が可愛いと思ふならば私の言ふことを聽いて下さい」と言つて両親を騙しました。それから又悲しい旅が続いて、だん／＼肉は減つて来て、ちやうど骨と骨の間の肉を刀で削り取るやうになつた、節々の間の肉を割き取るやうになつた、非常に痛いけれども、併し須闍提は「まだ／＼自分は耐えられます」と言つて強い意思を以つて生きて居つた。父母はその言に従つて遂に骨と骨の間の肉までも取つてそれを食ひ、少しの肉が残つて居つてもそれを取らなければならぬ程腹が減つて来た、それでもやはりそれを三つに分けてやはり一分は子に與へて二分を父母が食しつゝ旅を續けて行つた。父母は少し先の方へ歩いて、後から太子が働いた体を跛を引いて、痛みをこらへて行く

親孝行といふのは向ふへ掛けるだけではない、親に孝行することに依つて即ち自分が救はれる譯であるといふので、勇氣を起して耐えて居つた。

その時に王及び夫人は遂に隣國に達することが出来た、彼の國の王様は遠く出てこれをお迎ひになり必要のものを供給せられることになつた。大王は彼の國王に向つて、此處に来るまでは斯ういふ順序で實は子供の肉を割いて食ひつゝ来たのである、併しそれは子の親に對する孝養心が強い爲に生き永へて來ることが出来たと申した。これを聽いた隣國の王様は須闍提太子が捨て難き身体を割いて、爲し難き艱苦を爲して生肉を父母に捧げて孝養をしたといふことに感激して、その親孝心に感ずるが爲に、自分の國の軍隊を悉く父の王に貸與へると誓つた。そこで父の王はその兵を率いて自分の國に歸つて、羅睺

のであるが、父母は先の方で聲を擧げて泣いて居るけれども自分は足が痛くて十分歩くことが出来ないから、その間に相當の距離が出来て、父母の姿が見えなくなつた、太子は父母を戀ひ慕ふて、父母の姿の見える間は宜かつたけれども、姿が見えなくなつたのでどうなさるかと思つて、親の事を考へて一層悲んで、地に倒れて泣いて居つた、するとその体から血が出たり悪い臭ひがするので、澤山の蚊とか蛇とかいふやうな虫が、血の臭ひを嗅いでやつて来て、地に倒れて居る太子の体に吸付いて、或は螫し或は噛み、洵に苦痛言ふべからざる有様であつた併し太子は親孝行の考を以つて熱心に誓ひを立てて今自分は親に孝養を盡して居る、この精神を貫けば、これまでの罪障も免かれるであらう、父母に孝養を盡すといふそこに自分の救はれる力がある、唯だ

大臣を討つて遂に本國を回復することが出来たといふのである。

この事はまだ續いて詳しく因縁が説かれて居るがこれに就いて釋尊が言はれるのには、これは一つの因縁話であるが、その時の父の王とは、今現に我が父淨飯王がそれである、その時の母とは今現に我が母摩耶夫人である、その時の須闍提太子とは今の即ち我が身これである。我は家に居て孝を盡すとか、世俗的に孝を盡すと言へば、斯ういふ孝養の精神を有つて居るものだといふことを説かれたのである。

これは一つの話に託してはあるけれども、やはりこれが佛教の精神であると言はなければならぬ、表面の形は、体が出来し成道して佛となつて衆生を濟度する時分には、父母の膝下に仕へて孝養を盡すこととは出来ない。日蓮聖人が法華經宣傳の爲に父母の

膝下に居る事が出来ないと言はれたと同じ事で、又軍人でもその通り、軍職の爲に盡す時分には父母の膝下に居られぬけれども、その心持といふものは、親に對して斯ういふ孝心を有つて居られる、斯様な點から、佛教が父母の恩を説くといふことが唯だ普通のものでない、徹底的のものであるといふことを十分了解して置かなければならぬと思ふ。

尙ほ佛の恩に就いても、菩薩行に進む人は能く考へなければならぬし、又慈悲心から出て衆生を救ふ方の心得方に就いても考へなければならぬ。殊に慈悲心といふ事が佛法行者の心得として大事であるといふことは、慈悲心が即ち自分の教はれる所以なのである、今はたゞ佛に絶るといふことだけが教はれると思ひ過ぎて居る、善を行ふ力、それが即ち己れを救ふのである。「自分の力で善を行ふナンとい

事に於いて誠を捧げさへしたならば、萬燈を捧げなくとも一燈を捧げる所に功德がある。慈悲の心もやはりその通りであつて、その精神をモウ少し徹底的に御紹介すれば、最初に申した未曾有經の中に布施の事を説いて(十五套の十)

少分の施を行じ能く増上を起し、廣く一切衆生の最勝善心の爲に、獲る所の功德を一切衆生に回向す

といふ言葉がある、これはどういふ意味かといふと少しの布施をするのだけれども、その布施は微弱でも、それを大きく精神の方に於いて引伸ばして功德を成就することを言ふので、増上心と名くるのである、その事は斯ういふ具合に説明されて居る、一つの香を施す、例へば焼香なら焼香をする、どういふ積りですか、たゞ香をたくといふことだけでは意

ふことは軽いものだ、佛の功德は大きいから……」といふ其一つで行かうとするのは間違つて居る。佛の力は無論廣大であるけれども、志が善ければ小さな善の中にも大なる功德があると佛は説いて居る、小善成佛といふことが佛の眞理である、それが釋迦如來の大精神である。佛の力を認め、佛の恩を感ずるといふことも佛の大事なる信仰であるけれども又志清ければ少しの善根の中にも廣大な功德を成就する、所謂一粒萬倍といふか、一錢施せば一錢の價值しか無いといふものではない、同じ一錢でも志に依つて非常な價值を生ずる。即ち長者の萬燈より貧女の一燈といふことはそれを説くのであつて、萬燈を捧げても志正からざればその功德は淺し、貧女一燈を捧げてもその志清ければ萬燈に勝るといふ所が大事な點である。自分の力に及ぶ

味が少ないけれども、その時の自分の心の中に、どうぞこの美き香を嗅げば人が心持が良いと思ふが如くにこの教が弘まつて、世の人々をして、美き香を嗅いで氣分の良くなるやうな心持を以つて多くの人が生活するやうにしたものだと思つて、香を撮めば、香は一撮みであるけれども、一切衆生にその戒香、即ち戒の香を與へんとする精神は廣大なる功德がある。花を上げるのでも椿の花、菊の花一輪を佛前に捧げても、その時の心持が、どうぞ世の人達がこの花を見て美しく感ずるやうな歡喜の氣分を、人各々が平等に有つやうにありたい、或は又一つの燈火、五厘の蠟燭を上げて、どうぞ盲たる者がこれに依つて眼を開き、暗きに墜ちて物を見得ない者が光を眺めて喜ぶが如くに、多くの人が心の迷ひを去つて光明に照されるやうにといふ心持を有つたなら

ば、五厘の蠟燭一本の光にも廣大な功德があるといふのである。斯ういふ意味合を澤山教へて行くことに依つて、そこに又非常な價值がある、事實の功德もあらうが、又宗教がさう考へることに依つて社會一般が救はれることになつて行くのである。根本はその精神がなければ、社會事業などを難かしくいろいろと規則的に形式的に拵へ上げて、人各々にその精神が無くしてやつて行くと、結局本當の効果は現はれて來るものではない。總ての人々の心をさういふ風に慈悲の心を出發點に置いて行けば、その人々の一々の力は多い少いがあるけれども、併し極く僅かな所謂一華一香といふ供養の中にも廣大な精神が宿ることになる、之を能く了解して行く所に菩薩行があると思ふのである。

それも唯だ宗教的事ばかりではない、家に居つて夫婦の間の生活でも、親子の生活でも、主従の生活でも、妻が夫に對するやさしい精神があるならば、

寶物集

寶物集卷

第二 平康頼

十、三寶は眞の寶

良暫くありて、若やかなる女房の聲にて「抑佛法の寶にて侍らん事を承ら候はゞや」と云ひければ、此僧傲し打ち咲ふ氣色と覺えて云ふやう「佛法僧を以て三寶と申す也。名を以て意得侍るべし。又此の事初めて申すべきにあらず。昔天竺に國王御座き。名をば普安大王と申しき。隣の四人の國王の佛法の理をも知らず、罪障懺悔の心もなき事を悲み給ひ、方便を以て教へんがために、四人の王を迎へ奉りて、地には環珞を敷き滿ちて、薪には沉香を折り薫べ、菓には洞庭の橘を擗き、鱸には天地の鱠を切り調へ、玉の盃をして酔を勤めて、又金の琴柱

する事は僅かであつても一例へば肩を一つ叩くことに依つて、夫が癩癩持だが、この癩癩が癒つて呉れば宜いが……といふ風に考へて叩けば、たゞ肩の凝りが癒るばかりではない、その人が善良なる精神になり、世の爲に働く人になるやうにといふ、その理想の念願といふものが廣大な功德を成就するのである。その氣分が相互の間にはたらいて行く、その力用を獎勵するのが佛の教である。その教を宣傳するといふことは、結局さういふ事にあるのではないかと自分は思ふのである、今までのやうな形式上の問題に捉れてあまりやかましく言ひ過ぎて居つたのは、佛教の眞意義に遠かつて居るやうに考へられるのである。

どうか今後の佛教は、以上數回に亘つてお話し申した様な意味を整頓して、正しい意味の菩薩行の實行を中心として、益々世の爲人の爲に佛教の眞價を發揮して行きたいと希望する次第であります。(未完)

を雙べて興を催しなんどして、御物語を爲し給ひける。次に抑四人の國王、何事をか好ましと思召すと問ひ給ひければ、四人各心地能く打ち融けて言ひけり、一人の國王、我は常に國王として、大臣公卿に圍遶せられ、百姓萬民に仰がれて在まほしきと言ひけり。一人の國王は、我は父母六親に耐うて、立居の姿を見えもし、又は見ばやと思ふなりと言ひけり。一人の王は、我に形能き人に耐うて眠れてぞ在まほしきと言へり。一人の王は我は常に春の野に出でて花を見小松を引きて遊ばんと思ふなりと言ひけり。各かやうに言ひて後四人の王、又普安大王に君は何事をか好ましく思ひ給ふと問ひければ、答

へ給ひけるは、我身には常に、十善の位に居て、樂む事は目出度けれども、妻子珍寶及び王位などは後世まで身に付く事なし。父母六親に又副ばやと思ふは、孝養の志は深けれども生死無常心に叶ふべからず、常に形能き人にむつる、事はよけれども、能き形必ずしも久しからず、終には老のために衰れ病のために疲る。春の野に出て、霞に嘯き、花に嘲るは面色けれども、春を駐るに春駐らず、一旦の興に侍るべし。されば只生々世々の寶となるは佛法と云ふ物ぞ、好もしく待ると言ひければ、四人の國王普安大王の詞を感じ給ひて、總て普安大王に歸して佛の御所へ參り給ひけるとぞ聞こゆ。妙樂大師、往詣佛所の文を釋して云へる、細には、『五王經』に説けり、實に一切の寶には値ふ事ありと云へども、佛法の寶には値ふ事難し。されば『法華經』にも、

「一百八十劫空しく過ぐれども佛あふことなし。三惡道充滿して、阿修羅亦盛なり」と説き、又「無量劫にも是の法を聞かんと亦難し、能く是の法を聽く者は、此の人も復難し」と説けり。舍衛の三億は名をだにも聞かず。況や佛法流布せざらん國をや。されば佛法は寶なんめりと知りながら、如何やうに申すべしと覺え侍らず。

十一、佛法の大意

顯密の聖教八宗に別れて、經論五千三百七十二卷也。舍利弗が智惠富樓那が辯舌、猶し及ぶところにあらず。況やあやしの山老、争か申し述ぶべき。南都の修學に眼をさらさざりしかば「瑜伽」「唯識」にも聞く、北嶺の聖教に學を下さざりしかば「止觀」「女義」にも迷へり。雪を積み螢を集めずして徒に

鳩の杖の齡に及べり。然と云へ共、田舎、山寺に只暫居住して侍りしに、勸學院の雀は豪求を囀り、七金山の鳥の黄なる翅生ひたるらんやうに、をろをろ承はりしは、諸行無常を觀するを、佛法の大意とは申すところ承はりしか。大聖世尊、四十餘年の間多く法を説き給へるにも、皆諸行は無常なりとのみこそ侍れ、少々其文ごもを申し侍るべし。一切の有爲の法は夢、幻、泡、影の如く、露の如く、亦電の如し。應に是の如きの觀をなすべし。「是の日已に過ぎぬ、命は滅すること小水の魚の如し。斯れ何の樂かあらんや」

「譬へば、旃陀羅の牛を驅つて屠所に至るが如し。歩々死地に近づく。人の命は亦是の如し。一切の諸法は皆悉く空寂にして生も無く滅もなく大もな小もなし。人の命の停まらざること山水より

も過ぎたり。今日は存すと雖も明は亦保ち難し」又「維摩經」の十喻にも、此身は水に宿れる月の如し、電の如し、芭蕉の如しなど申したれば、諸行無常なりと觀じて佛法を寶と思ひ給ふべき也。

◎「維摩經」の心をば歌にも讀み侍り
手に結ぶ水に宿れる月影の
有るか無きかの世にも住む哉 貫之

◎世間を何に譬へん秋の田の
穂の上照す夜半の稻妻 源重之

◎長き夜の夢の中にて見る夢は
何れか現いかゞ定めん 權僧正永縁

十二、無常と常住

されば「諸行は無常なり是れ生滅の法なり。生滅滅し已れば、寂滅を樂と爲す」と觀ぜん人は皆佛法

の寶を儲くべき也、諸行無常は天に上る階、是生滅法は愛欲の海を渡る船、生滅滅已は劍の山を越ゆる車、寂滅爲樂は八相成道の證果なり。是の故に釋迦如來因位の御時、雪山童子にておはしましける時、天の帝釋、羅刹と云ふ鬼に變じ給うて、諸行無常是生滅法の二句を授け給ひし時、童子云ひけるは、此文はいまだ末の句あるべし、同くば授け給へと仰せられければ、羅刹の云はく授け奉るべけれども飢に勞れたり、我は人の血を吸ふもの也。御命を我に與へ給はく、末の句を授け奉らんと云へば、童子の云はく、命を與へて後何者が授かり申すべき、先末の句を傳へ給へ、聽聞して命を捨つべしと云ひし時、生滅滅已寂滅爲樂と授け奉る。童子此文を聽聞し給ひて、さしも峻き雪山の峯より、谷に向ひて、身を投げ給ひし時、羅刹御身を受け留め奉り、御心を見

ん爲め也、命を捨て給ふべきに非ずと言ひけり。されば半偈に身を投ぐると云ふ事は是れ也。祇園精舎の鐘の聲は、此文を唱ふる也。況や蜂蝶の化する命なり。争か諸行無常なりと觀ぜざらんや。渴鹿の墓無き身なり、何ぞ是生滅法を悟らざらん。出る息は入る息を待たず、石火の光る中に幾の樂みかあらん。金輪聖王の位を経し事は幾ぞ、天龍の恭敬を以て喜びとせず、況や人間の歸依をや。自ら帝たらんすら、何の益かあらん、況や彼に仕へて輕佻慢居せんをやとこそ、正覺聖人は書き侍りけれ。賢き人は皆過去遠々の流轉を觀じて、名利を求めぬ事にてこそ侍るめる。されば許由は位に即くべき由を聞きて穎川と云ふ川にて耳を洗ひしかば、巢父と云ふ者此の由を聞きて、其の河の流を忌嫌ひし也。是れ皆な諸行無常を觀する故也。又無言太子の十年までもの

語るや現ありし世や夢

大江定衡

(次續)

いはず、別成太子七度まで位を辭し給ひしも是生滅法を悟り給ふが故也。されば昔莊周と云ひし人の夢の中に、二百年の間蝴蝶となりて花の上に住みけるが、驚きて思ひけるは、夢を夢と思ふや、夢とも現とも分きかねてぞ侍りける。此心を江中納言匡房卿堀河院の百首の歌めしけるによめる。

◎百歳は花に宿りて過してき

此世は蝶の夢にぞ有りける
是れならず心ある人は、此世を必しも現とは思ひ侍らざんめん。

◎ぬるが内に見るをのみやは夢と云はん

はかなき世をも現とはみす
忠岑

◎よしさらば値ふと見つるに慰まん

覺むる現も夢ならぬかは
中納言實家

◎通夜昔の事を見つる哉

水清珠の能く濁水を清ましむるが如し、菩提心の珠も亦復是の如し、能く一切煩惱の垢濁を清ましむ。天上の黒栴檀香は若し一鉢を焼くも、其香り普く小千世界に薰す。菩提心の香りも復亦斯の如し、一念の功德普く法界に薰す。

華嚴經(入法界品)

治法要旨

先儒遺稿

得 人 第 一

家國天下を治むるは、役人に善人を用ゐるを要とすべし。よき人は只では出來ず。其拵へ方を知りて是を拵へるなり。其所を油斷すべからず。されども俄かには出來がたし。さればとて其出來るを待つてはゐられず。先づ是迄の人の内にて、よき人を撰り出すべし。其拵へ方は跡に載す。

善人を撰り出すには、先づ用ゆべき人と用ひまじき人の目録を辨へてよし。よき學問をよく仕負せ、人柄心いれよき、しつかりとしたる所ある。是をよき人と心得べし。其次は學問はなくとも、生れ付しつかりとしたる人柄心いれよき士を至極大切に思ひ

み、我をよきと立て、憐み薄き人也。此等の人は假令學問ありても、實の學問をしたる人に非ず。其次は差當り發明にて、人柄よく見え、奉公に精出して、誠に上を大切に思ふ心薄く、利祿の望深き人、是又よからず、惣じて人を見るには、差出の立派なるは、使者杯のみせ男には、成程よき様なれど、立派なる許りにて、誠の心薄く、正しき智恵なく、義に勇む魂の薄き者は、當分の間に合ひても、肝要の場を知る事なく、耻辱を取ることあり。まして國政を助くる役には、形は立羽と差當りのか、しめなる許りに目を付くべからず。第一目の内に氣を付け、心に人の實不實常々得と見届けて、平生の身持迄も得と考合せ、此三を本立として、何となく我氣にあふ人と、云ひ付くることのをよく合はする許りとをよき者と心得ず、實はなくして辨舌よきものをも、よ

身の爲を思はぬ人也。其二色の人は、差し當り不調法にても、全軀のしまり有る故に、何に付けても、本と要とを取失はず、大事の場の役に立ち大切なることの分をば、仕損はぬものなり。

諸役人の上に立つ役、並になしを立たる役には、此二色の人を用ゆべし。其次は心いれ人柄は次なりとも、差當り働のある人也。此人はよき人の支配を受ければ、今日の間には合ふものなり。さりながら此人をば猥に上に立てにくし。かゝる人の中には、心もとなきも有るべければ、能く見定めて使ふべし。悪き人とは、人柄宜しからず、心いれすなをならす實少く、意地わるく、人の非を見出し、我が智を頼

きものと思はぬを、人を見分くる法とす。かくの如くなれば人の善悪はよく分けらるべし。

見かけ柔過ぎたるもの、多くは實少なし。差當の才の有るもの、多くは實の才なし。見掛六ヶ敷者に、却て實心あり。差當り不才なる者に、結局實の才ある者あり。すらりとしたる者に、實智有る者也。是を考へて見立つべし。

變りたることを工み出し、上の利用に成る様にして、夫で自分の功をたて、立身の種にする者あり。此をよき人と思ふては濟まず。善人を見出す本は、上に立つ人の眼にあり。此眼を開くべし。是れ生れ付の知慧許りにては、中々頼みならず、其眼の開き方は、此下に顯はす。去れども差懸りては、我が眼だけに見分けねばならず。先づよき人を取出し度しと云ふ性根を丈夫に深く立つべし。是れ人を見る

本なり。此性根さへすわれれば、其心暗ます。其上、上にある目録にて、我目の及ぶだけ吟味すれば、中らすといへども遠からず。

善人あしき人を見分けること、君一人の目にて見分けても、中々行届き難し。見違も氣遣はしければ大臣を始めとし、重き役人、軽き役人迄にも、得と見分けさすべし。是又其眼を開かせてよし。眼くらくては、見違の程心もとなし。又軽き下役杯は、悪き人をも聞き見て、よく取なすことあり。心得て取捌くべし。大てい君のよき人を取出し度しと思ふ心十分に深くたてば、其下へ移りて、下も私なく、よき人を造めあげ、又よき者も出来るべし。仲弓の孔子に、焉知賢才而舉之と問ひし時、汝が知る所を舉げよ、汝が知らざる所をば、人それ捨てめやとのたまふ。よく／＼考へ玉べし。

ば、少しの疵は疵にならず、又一色しそこなひたる逆も、其人を捨つべからず。大本の所たしかなる人ならば、一旦の軽き仕損ひは夫を免して、しつぱりと用ふべし。小過を免すとはこれなり。家筋の内によき人あれば仕合せなり。家筋によき人少くば、家筋にかゝはらず、よき人を用ふるがよし、祿少くば、祿を増して用ゆべし。家筋の人は可なりなる人にも、其家筋だけに志あるもの也。其名にて國人も信用し、又家來にも勤め馴れたるものあれば、十分になくても、家筋の人を用ゆることなれども、家筋許りによき人揃ひ兼ねることなれば夫許りにかゝはりては、次第に國風衰ふること也。五人の役ならば、三人は家筋の者を用ひ、二人は家筋になくとも、勝れてよきを用ひ、祿をまして取りたつべし。軽き者は、其國に大勢あれば、此内にて

人君自分にも得と考へ、下へも尋ねられ、よき人と見えたらば、早速夫を舉げ用ゐらるべし。もし違ふべきか逆、ぐすつきおることに非ず。得と考へたる上、ふと見違ひたるも是非もなきことなり。よき人と見すゑても、夫を用ひずば、見すゑたる證はなく、いつ迄もよき役人出来ず。

中にも勝れたる人は、軽き役人にして置くべからず。ぐいと引き舉げて、上に立つ役人にすべし。魯の君、政を問はるゝ時、孔子對曰、舉直措諸枉則民服すと、此論を聞き、孔子といふ大聖人を目前に置きながら、夫を用ひ玉はず、淺間敷ことにて後世戒とすべきこと也。

人を用ゆるには、少の疵は捨て、其よき所を用ゆべし。疵なきものは稀也。たま／＼疵なき者は、多くは何もかも埒明かぬもの也。大本の所に違ひなく撰れば、勝れたる者多し。輕き者として取立間鋪理更になし。是を取立つるは、一國の爲、我子孫の爲なれば、祿をますを大儀に思ふ筈はなし。祿を惜んで國と家とを忘るゝは、世に云ふ小利大損なり。然れども覆りに取立つべきことに非ず。

もし我が出頭人の氣にあひたるを、めたとよき人と心得、夫を取立つる杯は、甚だあるまじきことなり。

善人を撰りて役人とするには、先づ其家の重役を第一とすべし。論語に、舜有臣五人而天下治ると云へり。又孝經に、諸侯有爭臣五人則雖無道而不失其國とあり。役人残らずが、勝れてよき人にてなくとも、せめて五七人も勝れてよき人を出して、人の上に立つべし。其國治まるべきこと明かなり。其故は、人はよく上の心に移る者なれば、

上によき人を用ふる心其下へ移り、其用ひたる人の風も傍輩へ移り、悪き者も善く成る也。悪き人を上に立て置いては、家中の悪く成るも、丁度此裏成るべし。其上よき人が上に立てば、其人の取出す人は自らよき人なり。此通りのことなれば、よき人を取上ぐる進も、始より大勢取出し、大分の祿をますにも及ばず。勝れてよき人四五人に思ひ切つて、ぐひと祿をやり、取立つる程のことは、成易きことなり。是程のことは、世人の目にも立たず。家中の受けぬことも有るまじ、男色杯の出頭にて、輕き者を家老用人に取立て、大祿をやりてさへ、上の至極に其を愛する故に、家中は結句恐れ憚り、其人の指圖を受くること例多し。勿論是は宜しからぬ、すまじきことなれども、是で考へてよき人を取立つることの成易きを知るべし。必竟賢を好むこと、色を好む心より薄く、賢賢易色の訓を得と吞込まれぬ故、徳ある人を、上に立つるを仕憎き様に思ひ玉ふ成るべし。

し。人の善惡をみる便りになるは、目付役なり。家に老に續きたる大事の役と思ひて、志するに直なるものを用ゆべし。又人の惡きを考へさする許りならず、随分はきと云ひ付けて、人のよきを見立てさすべし。政の行届くも、教の行届くも行届かぬも一人の目にて見難ければ、惡を見出させて、人威しにするばかりにあらす。

百姓を取扱ひ、町人を取扱ふ役、此又重き役也。情け深く理明かに、敬薄く諸ひなき人を用ゆべし。民の財を奪ひ、上の財をふやすをよき勤と心得てはすまず。役人の風惡き進、是を直すべき進、よき人を見立て、云ひ付けるならば、思ひ切つて、すか上座にいひ付けるがよし。何卒兩三人同時に云ひ付ければ、猶ほよかるべし。一人許りを大勢の下座にいれては、今迄の風中々直らず、結句やかましくなり、是人も得勤めず、其勤まらぬをみて、よき人を用ひても役に立たぬと思はん、志もたるむ事あるべし。(次續)

良齋間話

安積信

十五、機密を守れ

戦國策に逸詩を引いて、行百里者半於九十とあり。凡そ物事は成る様にて成り難きものなり。油断すべからず。且つ妄に人に語るべからず。事の成は吾精神の氣の爲す所なり。秋冬の間天地の氣收斂して外へ漏れざるゆゑ、春に至り萬物發生す。若し漏洩すれば、氣堅からずして發生の功薄し。人も妄に漏すときは氣薄うして成就する難し。易に機時不密則害成るとあり。後漢の賢武陳蕃忠義の士なり。宦官を誅せんとするに、機時を漏せしゆゑ反て禍を受けたり。明智光秀は弑逆の大罪人なれども、本能寺の事は心復三四人の外は知る者なし。軍を出し中

途にて、敵は本能寺に在りと號令して、軍兵始めて其事を知れり。此時豊臣太閤は、中國に在り毛利家と對陣す。本能寺の變を聞くといへども、神色自若として驚かず。諸將にも告げず、毛利家より安國寺長老を以て和議を請ひ來りしに、始めて其事を告げ和議二事を決せしむ。是は格別度量の豁大なる英雄ゆゑ、能く蓄藏し漏さず、又大變に當つて驚かざるなり。

十六、家内和合

荆州の劉表後妻の讒を用ひ、嫡子劉琦を惡み、次男劉琮に國を傳へんとす。劉琦憂ひて孔明に謀る。孔明云ふ申生は内に在つて危く、重耳は外に在つて

安し。劉琦これに由つて江陵に別居す。蔡慮者は孔明の父子を別居せしは、聖人至善の道に非すと議すれども、人の才徳各分量あり。舜の如きは別居に至らず。劉琦の徳は聖人の地に至らざる者なれば、強いて同居せしめば、必ず害に遇ふて、劉表は子を殺すの名を受くるなり。孔明其時宜を考へ才徳を量り、父子の恩を全うせしは孔明の才智なり。人は堯舜に非ず、誰か能く善を盡さん。一家の内互に心に叶はざること有りても、寛恕して倫理の重きを全うすべし。然るに父子、兄弟、夫婦、姑婦の間に叶はざることあれば、互に相責めて家の治まらざるは只愛憎好惡の俗情に引れ、道理を外にする故なり。父慈、姑順、兄友にして和睦するは、誰も能く爲すことにて珍しからず。無理なる父兄舅姑に能く事ふるゆゑ孝子、悌弟、良婦と云ふなり。父兄無理なり

十七、孝順の心

とて互に短長を争うては、人倫も五常も入らぬ者なり。宗の仁宗と母后と少々不和の事あり。仁宗怒り韓魏公に語りしかば、魏公云ふ古の舜は心悪き父母に孝を盡せしゆるゑ、萬世まで孝子と稱せらるなり。舜のみ孝子にて天下の人は皆不孝にも有るまじ。父母慈愛の人なれば其孝は知れざるなり。不慈の父母に能く誠を盡し事ふるこそ孝道なりと。仁宗感悟し母子の間睦じかりき。

一儒生堂に禮義を守り、能く母に事へしが、若し母の心に叶はざることもあらんと思ひ、他出と稱し密に壯下に匿れ伺ひしに、母の聲にて下婢を呼び、今日伴は遠方に他出なれば、歸宅は遅かるべし。伴の餘り禮義正しく堅苦しきには我は心安からず。今

日は茶を煮て緩々樂むべしと云へり。儒生大に驚き我平生禮義を守り、母に事ふるは孝道を盡さん爲めなり。然るに母の心安からざる様にては反て不孝に陥るなりと開悟し、是れより孝愛和順の道を致し事へしかば母子の間甚だ睦じかりき。禮記の父母に事ふる禮に、下氣怡聲とあり。又柔色以温之とあり。又孝子之有深愛者必有和氣有和氣者必有愉色有愉色者必有婉容儼威儼格非所以事親也とあれば、親子の間は恩愛を主とし、大害なきことは曲従すべし。尹和靖の母の爲めに佛經を誦せしことを譏る人もあれども、己の佛を信するに非ず、母の心を悦ばしめん爲めなれば、深く議するに及ばざるに似たり。

十八、忠孝兩全

人倫五有りて父子君臣の道より重きはなし。君父に輕重はあらざれども、君の爲めには父母を顧み難きことあり。因て忠孝不兩全と云ふ。愚案するには、忠孝は本一理なれば兩全なるべし。且つ孝道包む所甚だ廣し。曾子曰、居處不莊非孝也、事君不忠非孝也、莅官不敬非孝也、朋友不信非孝也、戰陣無勇非孝也。されば孝は仁と徳を同うし、天下の道を兼ぬる者なり。戰陣にて死するは忠なり。即ち孝なり。是れ忠孝兩全ならずや。晋の周處戰に赴きし時、忠孝不兩全と言ふて二つに分けたるは誤なるべし。親の側に終身侍養する願ならば仕官はせざるべし。既に君に事ふる後は、忠義を致し死生患難は顧みざるべし。父母の心にて我子忠臣たらば、いかで喜ばざらんや。孝は父母の心を悦ばしむるを第一とす。是れ忠孝兩全ならずや

左傳に楚の令尹子南罪あるに因て、楚王これを誅せんとす。子南の子弃疾は王の御士たり。王子南を誅せし時、其屍を請うて葬り、遂に縊れて死す。唐の李懷光謀叛せんとす。其子李璀諫言すれども用ひず。李璀其事を書し天子に奏し自殺す。其父も誅に行はれたり。此類は忠孝不兩全に似たれども、其父謀叛するは不忠の人なり。其子の諫に従ふならば安全なるに、自ら廟を招きしなり。其子の父を諫るは孝なり。天子に奏せしは忠なり。是も忠孝兩全と謂ふべし。五代史唐の莊宗の臣李從環は明宗の子なり。明宗兵を起せし時、從環は父に従はず君に従つて死す。歐陽公云ふ、忠孝以私則兩害、以義則兩得。從之於莊宗、知所從而得其死と稱美せり。北條氏の臣松田尾張守謀叛す。其子英春密に主人に訴へ、父の助命を請ひしが叶はずして其父誅せられ

たり。叛逆は天下の大罪にて、許し難き者の助命を請ふは愚なり。又父誅せられて自殺せず、北條氏滅後他へ仕へしは不忠不孝と云ふべし。後漢の趙苞五代の烏震は、其母を敵に囚れたる時、暫く降つて母を教ふといへども、國家の存亡にあづからず、輕重を量り義を以て行ふべきに、其親を顧みず捨殺にせしは、大不孝にして又忠に非ず。能く時宜を量り義に従へば、忠孝兩全なるべし。

十九、君臣の義

宋の太宗の時吾邦より奮然と云ふ僧入唐し、太宗に謁見せし時、日本の事を問はれしかば、吾邦は上古より今に至るまで百代一姓と對ふ。太宗太に感歎して、我國は僅五十年の間、梁唐晉漢周と五代姓を易へ、天下の大亂極りしに、日本は尊き國と稱せり

願ひ人に應じ放伐のこと起るなり。是は聖人の已むを得ざる所より出づ。然るに後世は、君恩の厚薄に因て臣下の事ふる厚薄を生じ、主君の是非に依て臣下の事ふるに輕重あるは湯武の本意に非ざるに似たり。後世忠臣と稱する晉の豫讓の云ふ范中行氏は衆人を以て遇するゆる、衆人を以て報す。知伯は國士を以て遇するゆる、國士を以て報す。是君恩の厚薄に因て事ふるに厚薄を生ずるなり。我國の風俗にては主人無道に遇せらるゝも、忠義を盡すを以て道とするなり。

(次續)

X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X

舜水先生水戸に聘せられし時、水戸家中の僅一僕を使ふ者にも、其僕の主人に對し禮義の厚きを見て日本は君臣の禮義正しき風俗なり。我國もし如此忠義の風俗あらば夷狄には奪はれまじき者をご嗟嘆せり。(清の梁王繩日本碎語に五倫中惟君臣之義最嚴其餘蔑如也と云ふは長崎の風俗のみにて吾邦の風俗を盡さるゝ丈なれども君臣之正しきは稱美せり)吾邦君臣禮義の正しき、萬國に秀でたる知るべし。漢土は疆域廣大にて、政教達し難く騷亂起り易く、又戎狄と土壤相接し外寇入り易し。故に太古より帝王代々姓を易へて堯舜の禪讓湯武の放伐より、今の鞏固に至るまで、幾姓幾代を易ふるに至る。是れ土地の然らしむる所なり。是に因て天下は一人の天下に非ず。天下の人の天下なり。帝王も天下の義主と稱し、其職を治めず人民を塗炭にすれば、聖人天に

◆日什大正師略傳 (遺稿ノ一)

故權大僧正 竹内日照師記

日什大正師の正傳は、夙に日鑑上人に由りて撰述せられ、廣く世間に行はれたるも、更に檢校して竹内日照師之を記述せらる、日照師は過般遷化せられ遺弟大和久無染君師の遺稿を整理して、本誌に寄せらる、由て之を連載すること、なせり。

一、誕生

日什大正師は清和天皇の苗裔源八幡太郎義家の

末孫であつて奥州會津郡黒川(文祿元年黒川を改めて若松と稱す)に誕れた、祖先已來代々鎌倉の將軍家に仕へて居た、祖父石堂氏某北條の奢侈を惡み勤仕を止め通れて奥州會津の城北瀧澤に居を卜した此の人に男子ありて石堂太郎覺知といふ是れ則ち上人の父である。覺知後に居を瀧澤の西大塚山の麓に移せしより氏を改めて石塚とした、會津の城主輩名四郎盛宗の女清玉姫を娶る是れ上人の母である。覺知初め子無く瀧澤の八幡宮に祈りて上人を擧ぐ實に是れ人皇九十四代花園天皇の御宇正和三甲寅四月二十八日にして日蓮大聖人滅後三十三年に當るのである。

◆知法思國會々則

- 第一章 名 稱
第一條 本會ハ知法思國會ト稱ス
- 第二章 目 的
第二條 本會ハ國民思想ノ健全ヲ期スルヲ以テ目的トス
- 第三章 事 業
第三條 本會ハ其目的ヲ達スル爲メ左ノ事業ヲ行

省を求め無産者には輕舉誘惑に乗ぜらるゝを戒め知見と修養とに努めしめ國民相互に協心戮力し區々たる地位職業の差別を問はず舉國一致國民總動員の下に此大事業を完成すべし
斯くの如き正攻法を確立して之を勵行せば當に思想界の病弊を匡救するのみならず所謂理想的文化の建設に寄與し衆生濟度の實を擧げ國家の興隆を確保し國體の尊嚴を擁護し國民の福利を増進し自他共榮の春を迎へ吹く風枝を鳴らさず雨壤を碎かず貧富貴賤齊しく自慶の地に安住せん豈復愉快ならずや
若し夫れ思想混亂し人心廢頽し國家の統制を失ふに至らば經濟上の施設軍事上の防備如何に完成するとも到底國家の興隆民人の福祉を保護すること能はず由來文明の施設に於て本末を誤り輕重を逆にしたる爲め今日の如き失態を醸せるなり古賢言ふあり其心に作つて其事に害あり其事に作つて其政に害あり聖人復起ると我言を易へすと又言ふあり法は體なり國は影なり體曲れば影斜なりと嗚呼大なる真理は古今一貫せり我等は此真理に立脚し知法思國の志に感憤し至心に自誓し各自の力を最善に活用せんと欲す同感の士女起つて此法戰に參加し速に正定聚を結成せよ

昭和三年七月 知法思國會

- 第四章 事 務
第四條 本會ノ事務ヲ處理スル爲メ本部ヲ東京ニ支部ヲ適宜ノ地ニ設ク支部ノ設立ハ理事會ニ於テ之ヲ決定シ支部細則ノ制定ハ本部ノ指揮ニ屬シ會計ハ獨立スルモノトス
- 第五章 會 員
第五條 本會ハ會費トシテ毎年一圓以上ヲ寄附スル人ヲ以テ會員トス 入會退會ハ申込ニ

依リ除名ハ理事會ニ於テ決ス

第六章 役員

第六條 本會ニ左ノ役員ヲ設ク
理事 五名 庶務 若干名 顧問 若干名
理事ハ創立者之ヲ指名シ理事長ハ理事ノ互選ヲ以テ之ヲ定メ一切ノ會務ヲ處理ス

第七條 理事ハ常務ヲ處理ス任期ハ二ケ年トス
庶務ハ事務ヲ分掌ス理事長之ヲ任免ス
顧問ハ理事會ノ決議ニ依リ推薦シ任期ヲ定メズ顧問ハ本會ノ事業ヲ輔導ス

第八條 本會ノ收入ハ會費並ニ寄附金其他ノ雜收入ニシテ支出ハ理事會ノ承認ヲ經ルモノトス

第九條 本會ノ收入ハ會費並ニ寄附金其他ノ雜收入ニシテ支出ハ理事會ノ承認ヲ經ルモノトス

第十條 本會ノ收入ハ會費並ニ寄附金其他ノ雜收入ニシテ支出ハ理事會ノ承認ヲ經ルモノトス

第十一條 本會ノ事業狀況並ニ會計報告ハ出版物又ハ新聞雜誌ニ掲載ス

第十二條 本會ハ追テ法人ノ認可ヲ受クルモノトス
本會々則ニ規定ナキモ必要ナル事務ハ理事會ノ合議ニ附シ理義ニ依リテ處理ス

第十三條 以上

人 (同會會員の自警文)

人は先づ正意誠心なれば正意誠心ならんと欲せば天地宇宙に對して敬虔の情操を養ひ進んで宗教的信念に任せよ宗教の信念に於ては深く迷信を警め固陋を排し正信正解を獲得せよ一たび正しき信解を得ば法悦歡喜の心油然而として涌き眞正なる幸福を享受し正義の力躍然として發動し道義的感情に促されて必ず善徳を行ふに至らん此に於て乎元氣充實し能率増進し事業を成就し目的を達成すべし而して信念と道念とは愈其人格を大にし天下復畏るべき者無きに至らん佛教に於ては信念より菩薩行に入り遊行畏れなきこと獅子王の如くならんと説き儒教に於ては誠は天の道誠を思ふは人の道至誠にして動せざる者は古より未だ曾て之れ有らざるなりと言へり人若し此信解行願に立つを得ば文化の創造に對しては物質偏傾の病弊を看破し理想的文化の何たるかを會得し中正穩健の行動を取るに至り東洋文化の特色を讚美して之を奉行し西洋文化の長短を批判して其取捨を誤ること無く又國家存立の意義を領得し國家は内に國民の幸福を保證し徳性を發育し外に世界の文化に寄與し人類の發達を擁護す個人主義博愛主義の有する長所も亦國家の理想的活動に由つて完成せらるる所以を知得し進んで我國體の尊嚴を敬慕し皇室の聖徳を

光揚し忠愛の觀を増大し社會共存の誼を尊び家族親和の實を重んずるに至らん天地の人としては敬虔の心に住して其獨を慎み見えざるを恐懼し聞えざるを戒慎し家庭の人としては父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し社會の人としては恭儉己を持し博愛衆に及ぼし知能を啓發し徳器を成就し公益を廣め世務を開き國家の人としては克く忠に一旦緩急あれば義勇公に報じ以て天壤無窮の皇運を扶翼し世界の人としては東西相倚り彼此相濟し以て文明の惠澤を共にし斯く

各地教信

○東京統一團本部教報

八月號の統一誌上で發表して置いた通り、七月廿日午後六時から、本郷の帝大佛敎青年會館で、統一團本部支部并に本郷春木町青年團聯合のもとに思想問題大演說會を開演した。定刻には聽衆滿場、春木町青年團長加藤君開會を宣するや聽衆熱狂、大で松村中將起て日本海海戦の有様を述べ、國難に當るの日本魂を高調力説し、日本人特有の宗教的大信念に立脚したる正義の捨身で進め教て百難悉る、に足らず、と聽衆益熱狂最後は本多日生現下の思想國難と立正大師と云ふ熱烈なる懸河の

辯、思想國難打開の道は日蓮主義を指いて他に求むる處斷じてなし、立正大師は己で六百年の昔立正安國の大義を説いて國民的思想的武裝を警告された、と津々二時間十時半拍手の内に會を閉じた。當日主催者側では大衆日新聞社の者らしかつたが、観下の講演中「東洋文明の眞價を知らずして西洋文化を憧れて居るものこそモダン式のキケン人物である」この語に至つて、貰つた座本の思重經をシラクチャにして、キツけた上に下駄でフミにじつて出て行つた者があつたとか閉會後の茶

話會での話。

統一團に於ての廿四、五、六に亘る三日間の夜間講習會は、各日共に聽講生百七十餘名、何れも熱心な聽講振り、第一日の浦川労働係長の「共產事件に就て」の委しい話を聞た時は、一同熱然として日本國の暗黒たる國狀に驚き、期せずして人々の心持は一段の發憤を用するの覺悟を起した様な緊張さを見つけた。第二日は佐藤謙太郎氏の「思想問題に就て」の警告的なお話、第三日は本多現下の「思想問題と佛敎」と云ふ堂々たる大演說、當日は特別に別人の如き現下の緊張した演說振り、聽衆相和して場内は何んそなく一種の殺氣をおびて、三日間の内では一番暑い日であつたが、湯桶水を打つた如く、其の中に現下は汗一つフカズして論議を進められ、宗教、道徳、哲

學、科學とあらゆる時代思潮の病見を、あの明快なる雄辯を以て論難駁撃、聽衆益熱して時の遷るを知らず、新くて十時以下の講演演が終ると主賓團を代表して榎木新正閉會の辭を述べ、暑中三日間の講習會を無事終了した事を感戴した。當日の來會者二百十八名、因みに、先き頃來より協議中であつた、思想國難對策運動として、知法思想會が廿四日の午後發起人會で決定組織されたので、直ちに夜の講習會席上で發表された、具體的の運動方法は本月(八月)十一日の理事會に於て決定される模様。

吾れ等同志が野口日主上人を主盟として、三年前より組織されて運動をついけつゝある立正安國政教俱樂部でも、共產黨撲滅運動の第一戦に起つべく、講習會の開催と共產黨撲滅パンフレットを出版し、全國民に向つて一大警告をなすさか、目下同人は奔走中とか。

(榎木記)

京都活動教報 七月△二日本山國會議、現代の世相に就て」有田宏道、△二日山國會議、代「法華經講義」原田日勇、△五日維新細矢家庭講話、夫婦に就て」原田日勇、△五日西陣興道館「法華經講義」原田日勇、△八日於成就院護正婦人會、婦人と婦人」有田宏道、△八日於本正寺「法華信行の確立」有田宏道、△九日於正行院正行婦人會、護法論」原田日勇、△十三日維新細矢家庭講話、親子に就て」原田日勇、△十六日於法光院妙光婦人會、吉原道談、△十

八日於本山講堂純正佛敎講演會例會「尊卑に選れ」土持真達、「自由の樂園」原田日勇、△廿二日妙蓮寺天幕内に於て傳道「思想問題解決の鍵」有田宏道、「尊尊の處世訓」原田日勇、△廿三日人生に於ける信仰の價值」齊藤政徳「全人としての日蓮上人」小橋秀春、「苦の解脱としての日蓮主義」寛義章、「我國將來の宗教其の一」萩原日道、△廿四日續寛義章「恐るもの恐る」に足らず」土持真達、「續講其二」萩原日道、△廿五日日蓮主義の國體觀」吉塚布教師、「續講其三」萩原日道、△廿六日「佛敎の經濟觀」井上金次郎、「續講其二」原田日勇、△廿七日信仰に就て」文學士中村英俊、「續講其三」原田日勇、△廿八日所感「板倉西岳、「眞の我眞の佛」京藤布教師、「續講其四」原田日勇、以上一週間に亘る天幕傳道は各講師の熱誠溢るる講演善く聽衆の踴躍に徹し思想正導に就て多大なる効果を收めたり△廿八日於本山開山會「安心問題」有田宏道、△廿九日

野純義師、「敎の力」栗原顯有師、△廿四日(南郡)午後七時より高津町長秀寺に於て開會「感應生活」小竹圓明師、「努力精進の時」小竹俊雄師、「夫在共榮の眞意義」小林日種師、「日蓮上人の高風」秋葉日度師、△廿四日(北郡)神時町妙經寺に於て午後七時より開會「行學の二道」高岡文憲師、「人間苦の解脱」徳會映師、「佛敎と道徳」星野純義師、「敎の力」栗原顯有師、△廿五日午後一時より木更津町成就寺に於て第三布教聯合會主催に依り明治天皇第十七回御忌奉悼會を厳修出席僧員二十餘名多拜者堂に滿つ、式後聖徳講演開會、
「聖徳無窮」布教師小林日種師、「御聖徳餘聞」縣立中學校教授高橋采和先生、△七月廿五日午後七時より木更津町成就寺に於て開會「時代想と佛敎」高岡文憲師、「佛敎と道徳」星野純義師、「身護法華」秋葉日度師、「閉會辭」小竹俊雄師、「身護法華」秋葉日度師、「閉會辭」小竹俊雄師、右の如く夏期精進講演を實行し來る事茲に三年會を重ねるに従ひ參會者を倍加するは相當教化の實効ある事を確信し南北兩隊一行の道人は愈々堅實なる歩み以て一層佛敎に精進せん事を誓ひ廿六日午前教會

金澤教報 △家庭講話七月六日寺町林氏

宅にて、信仰は不滅の寶」能仁一十師、△學生講話七月七日第四高等學校に於て「日蓮主義研究の準備」能仁一十師、△信仰講話七月二十一日日本長寺に於て「時の流れと佛敎」寺島常智師「夏が與へる信仰生活」能仁一十師、△天晴會七月二十六日本長寺に於て「未法の佛敎」杉田常政師、「衛生に關する佛敎の教訓」能仁一十師、△家庭講話七月二十九日本多町河合氏宅にて「佛敎を求むる人々」能仁一十師、
金澤教壇活動史 △家庭講話六日野町三丁目に於て「社會の淨化も家庭から」能仁一十師、△家庭講話七日兼六公園茶室にて「自然美と修養」能仁一十師、△信仰講話二十日立正寺にて「釋迦傳」杉田常政師、△法要講話二十一日玉水町寺窪宅にて「敎へて歸る子は佛なり」能仁一十師、△婦人會二十二日本長寺にて「發願喜心」能仁一十師、△家庭講話二十三日本多町河合宅にて「佛敎の慈悲」能仁一十師、△天晴會二十六日本長寺にて「思想國難に直面して」本報日常氏、「宗教存在の理由」能仁一十師

備前草生教報 七月 △十日參詣日「六根禮讚」中山賢勇師、△十一日家庭講話下山家にて「要文講讀」中山賢勇師、△十二日夜說教會、其二講讀中山賢勇師、△十三日夜檢原宅にて「其三講讀」中山賢勇師、△十四日檢原淺次宅にて「苦惱の勝利者」中山賢勇師、△廿一日參詣日「悉皆金色の願」中山賢勇師、△廿一日より三日間夏新禱會「今身より佛身え」中山賢勇師、△廿八日田原村小學校三會聯合總會「至上者を求むる人々」中山賢勇師、▽廿日女子青年團講演「悲惨なる滑稽」中山賢勇師、△廿一日「婦人會」中山賢勇師
大阪教報 七月△八日蓮成寺にて「立正安國論講義」上田師、△十二日堂園寺にて「三秘の妙解」和井田氏、「自我獨講義」京藤師、△十九日學主巡回講演「日蓮聖人の人格」齊藤政徳氏、「折伏に對する一考察」寛義章氏、「法華信仰の二十特長」大泉事龍氏、△二十日蓮成寺にて「全人としての日蓮聖人」小橋氏、「信仰の力」齊藤氏、「苦の解脱としての日蓮聖人」寛氏、「緣起思想に就て」大泉氏、△二十二日堂園寺にて「自我獨講義」京藤師、△二十六日武田宅にて「眞の我と眞の佛」京藤師、「信仰の心得」上田師、△八月八日蓮成寺にて「法華經と日蓮聖人」木之宮氏、「立正安國論講義」上田師何れも盛會多大の効果を奏せり



社寺建築及臺灣檜材の安價提供
設計監督 (三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務
文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の
設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に
拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御
入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不
充分なる檜材は干割狂ひ等の缺點多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社寺工務所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社寺工務所鶴見支所

福岡市外壱箱町馬出松原

社寺工務所福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社寺工務所大阪支所

(電話西三三二四番)

- 臺灣檜材の特長
- 一、耐久防腐
 - 二、蟻害絶無
 - 三、香氣清楚
 - 四、木質堅緻
 - 五、理整然木
 - 六、木高雅包

統一定價

一	半	一
一	ケ	冊
ケ	ケ	冊
年	年	冊
金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	送料共
送料共	送料共	送料共
事之	金前	金前

統一廣告料

一	表	一
四	紙	頁
分	頁	頁
一	頁	頁
頁	金	金
金	拾	貳
五	九	拾
圓	圓	圓
事之	金前	金前

昭和三年八月廿四日印刷納本
昭和三年九月一日發行 (第四百二號)

不許複製

編輯兼 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行人 小林 順 義
印刷人 鈴木 日 雄
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百八十一番地
電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所

振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ



次 目

宗教撰擇の基準……………	本多	日生
立正大師の功勳……………	本多	日生
日什大正師略傳……………	竹内	日照
西郷翁と日蓮聖人……………	塚本	松之助
聖訓摘要……………	本多	日生
知法思國會の懇談會……………		